

# 門真出身の総理大臣 幣原喜重郎と憲法九条

門真市職員労働組合 執行委員長 西本孝雄

「戦争する国」づくりの総仕上げとして、安倍首相は日本国憲法第9条の改憲をねらっています。門真出身の総理大臣 幣原喜重郎がこの憲法九条の提案者であることが近年の研究で明らかになっています。

## 憲法九条の発案は幣原

改憲を狙う安倍首相は、現憲法は「連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）によってつくられた」と、「押しつけ憲法」を強調し、自主憲法制定の論拠としています。

しかし、日本国憲法9条の発案は門真出身の総理大臣 幣原喜重郎であることが近年の研究で明らかになっています。

## 高柳・マッカーサー往復書簡

日本国憲法の成立過程で、戦争

## 日本国憲法

### 第2章 戦争の放棄

第9条 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

の放棄をうたった九条は、幣原喜重

郎首相（当時、以下同じ）がGHQ側に提案したという学説を補強する新たな史料を堀尾輝久・東大名誉教授が見つめました。

九条は、1946年1月24日に幣原首相とマッカーサーGHQ最高司令官が会談した結果生まれたとされますが、どちらが提案したかには両説があります。マッカーサーは米上院などで幣原首相の発案と証言していますが、「信用できない」とする識者もいました。

堀尾氏は1957年に岸首相（現安倍首相の祖父）の下で改憲の議論

が始まった憲法調査会の高柳賢三

会長が、憲法の成立過程を調査するため1958年に渡米し、マッカーサーと書簡を交わした事実に着目。高柳は『九条は、幣原首相の先見の明と英知とステーツマンシップ（政治家の資質）を表徴する不朽の記念塔』といったマ元帥の言葉は正しい」と論文に書き残しており、幣原の発案と結論づけたとみられています。だが、書簡に具体的に何が書かれているかは知られていませんでした。

堀尾氏は国会図書館収蔵の憲法調査会関係資料を探索。2016年1月に見つけた英文の書簡と調査会による和訳によると、高柳憲法調査会会長は1958年12月10日付で、マッカーサーに宛てて「幣原首相は、新憲法起草の際に戦争と武力の保持を禁止する条文をいれるように提案しましたか。それとも貴下（マッカーサー）が憲法に入れるよ

う勧告されたのか」と手紙を送りました。

マッカーサーから15日付で返信があり、「戦争を禁止する条項を憲

高柳賢三憲法調査会長に對するマッカーサー元GHQ最高司令官の返信

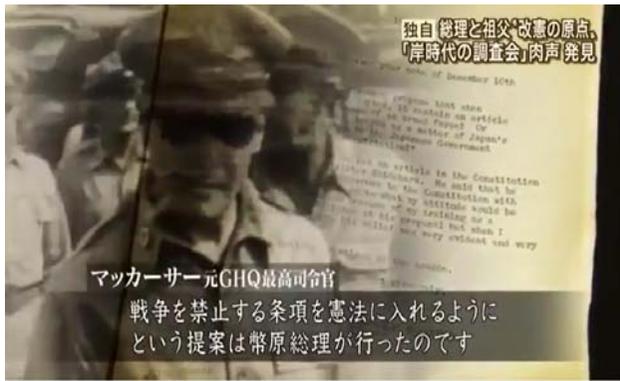
（憲法9条は）世界に対して精神的な指導力を与えようと意図したものであります。本条は、幣原男爵の先見の明と経國の才とえい知の記念塔として、永存することでありましょう

（1958年12月5日）

戦争を禁止する条項を憲法に入れるようにという提案は、幣原首相が行ったのです。首相は、わたくしの職業軍人としての経歴を考えると、このような条項を憲法に入れることに対してわたくしがどんな態度をとるか不安であったので、憲法に関しておそろおそろわたくしに会見の申込みをしたと言っておられました。わたくしは、首相の提案に驚きましたが、首相にわたくしも心から賛成であると言くと、首相は、明らかに安どの表情を示され、わたくしを感動させました。

（1958年12月15日）

法に入れるようにという提案は、幣原首相が行ったのです」と明記。「提案に驚きましたが、わたくしも心から賛成であると言うと、首相は、明らかに安どの表情を示され、わたくしを感動させました」と結んでいきます。



で、ジャーナリストの鈴木昭典氏が国立公文書館で見つけた憲法調査会の参考人からのヒアリングの音声資料が紹介されました。

岸首相のもとで発足した憲法調査会では改憲のためのお膳立てとして、憲法が占領下の押しつけであることを明らかにすることだと考える委員が多数を占める中で公聴会。そのなかで小山武夫元中部日本新聞政治部長が「あれは私である」「私がマッカーサー元帥に申し上げて、それが九条になったのだ」と幣原から直接聞いたという興味

## 「報道ステーション」での音声データ

2016年2月25日に放送されたテレビ朝日「報道ステーション」



深い音声証言も紹介されました。（ユーチューブでもアップされています）

## 幣原の元秘書だった平野三郎の聞き取り

衆議院議員であり、幣原の秘書官であった平野三郎は、幣原が亡くなる10日ほど前の、1951年（昭和26年）の2月下旬に日本国憲法「戦争放棄条項等の生まれた事情を聞いています。」

そこで憲法調査会は平野氏にその事情を聴いています。平野氏は『幣原先生から聴取した戦争放棄条項等の生まれた事情について』という報告書を憲法調査会に提出しています。次のページに幣原の主な言葉を記載しています。

「何のために戦争に反対し、何のために命を賭けて平和を守ろうとしてきたのか。今だ。今こそ平和だ。今こそ平和のために起つ秋（とき）ではないか。そのために生きてきたのではなかったか」「何人かが自ら買って出て狂人

とならない限り、世界は軍拡競争の蟻地獄から抜け出すことができないのである。」「その歴史的使命を日本が果たすのだ。」  
幣原の平和への熱い思い、戦争放棄という憲法九条の考え方が伝わってきます。

### 憲法9条制定を巡る主な経緯

- 1946年1月24日 幣原喜重郎首相とマッカーサーGHQ最高司令官が会談
- 2月13日 GHQ草案を日本側に提示。現行9条の要素が盛り込まれる
- 3月6日 日本政府案を発表
- 6月20日 帝国憲法改正案を帝国議会に提出。修正が進む
- 10月7日 成立
- 11月3日 日本国憲法として公布
- 1947年5月3日 日本国憲法が施行
- 1951年5月5日 米上院でマッカーサーが、9条は幣原の発案と証言
- 1957年8月 内閣に設置された憲法調査会が憲法の再検討を開始
- 1958年12月 調査会の高柳賢三会長が訪米し、マッカーサーと書簡を交わす
- 1964年7月 調査会が報告書提出。改憲の是非について結論を出さず
- 2016年1月 堀尾氏が国会図書館収蔵高柳・マッカーサー往復書簡を発見

## 平野三郎の憲法調査会への「報告書」による、幣原喜重郎元首相の主な言

問い 第九条は現在占領下の暫定的な規定ですか、何れ独立の暁には当然憲法の再改正をすることになる訳ですか

一時的なものではなく、長い間僕が考えた末の最終的な結論というようなものだ。

問い 軍隊のない丸裸のところへ敵が攻めてきたら、どうする訳なのですか

それは死中に活だよ。一口に言えばそういうことになる。

次の戦争は短時間のうちに交戦国の大小都市が悉く灰燼に帰して終うことになるだろう。そうなれば世界は真剣に戦争をやめることを考えなければならない。そして戦争をやめるには武器を持たないことが一番の保証になる。

相手はピストルをもっている。その前に裸のからだをさらそうと言う。何と言う馬鹿げたことだ。恐ろしいことだ。自分はどうかしたのではないか。若しこんなことを人前で言ったら、幣原は気が狂ったと言われるだろう。正に狂気の沙汰である。しかしそのひらめきは僕の頭の中でとまらなかつた。どう考えてみても、これは誰かがやらなければならないことである。恐らくあのとき僕を決心させたものは僕の一生のさまざまな体験ではなかつたかと思う。何のために戦争に反対し、何のために命を賭けて平和を守ろうとしてきたのか。今だ。今こそ平和だ。今こそ平和のために起つ秋（とき）ではないか。そのために生きてきたのではなかつたか。

僕は平和の鍵を握っていたのだ。何か僕は天命をさずかつたような気がしていた。非武装宣言ということは、従来の観念からすれば全く狂気の沙汰である。だが今では正気の沙汰とは何かということである。武装宣言が正気の沙汰か。それこそ狂気の沙汰だという結論は、考えに考え抜いた結果もう出ている。要するに世界は今一人の狂人を必要としているということである。何人かが自ら買って出て狂人とならない限り、世界は軍拡競争の蟻地獄から抜け出すことができないのである。これは素晴らしい狂人である。世界史の扉を開く狂人である。その歴史的使命を日本が果たすのだ。

問い 他日独立した場合、敵が口実をつけて侵略したら

その場合でもこの精神を貫くべきだと僕は信じている。そうでなければ今までの戦争の歴史を繰り返すだけである。然も次の戦争は今までとは訳が違う。僕は第九条を堅持することが日本の安全のためにも必要だと思う。

問い 憲法は先生の独自の御判断で出来たものですか。一般に信じられているところは、マッカーサー元帥の命令の結果ということになっています

そのことは此処だけの話にして置いて貰わねばならないが、〈中略〉憲法は押しつけられたという形をとった訳であるが、当時の実情としてそういう形でなかつたら実際に出来ることではなかつた。そこで僕はマッカーサーに進言し、命令として出して貰うように決心したのだが、これは実に重大なことであって、一步誤れば首相自らが国体と祖国の命運を売り渡す国賊行為の汚名を覚悟しなければならぬ。〈中略〉幸い僕の風邪は肺炎ということで元帥からペニシリンというアメリカの新薬を貰いそれによって全快した。そのお礼ということで僕が元帥を訪問したのである。それは昭和21年の1月24日である。その日、僕は元帥と二人切りで長い時間話し込んだ。すべてはそこで決まった訳だ。

世界の共通の敵は戦争それ自体である。

## 大阪府門真一番村に生まれる

幣原喜重郎は、1872年（明治5年）に大阪府門真一番村（現・門真市一番町）で門真を代表する豪農であった幣原新次郎と静の次男として生まれました。

喜重郎の生家は現存していませんが、一番町の一角に生家跡が残され、兄・坦と喜重郎の兄弟の顕彰碑が建てられています。

外務省の後輩に当たる吉田茂の直筆により、「喜重郎首相の経緯は永遠の平和」と記されています。



## 教育熱心な父母に育てられ

父の幣原新次郎は、門真の下嶋頭に暮らしていた市川家からの婿養子であり、幣原九次郎の長女静と結婚しました。新次郎は、門真村初代の助役でした。

新次郎は、豪農としての経営を引

き継ぐ一方で、長男坦や次男喜重郎など二男二女の教育に熱心でした。

「子どもだけは立派に育て、幣原家のためになつてもらいたいと考え」「財政を売り払っても学費にあてねばならぬと決心した」といいます。親戚はこぞつて「百姓に学問はいらぬ」と反対しましたが、長男次男を東京帝国大学に下の女の子二人も学校にいかせました。

兄、坦は東洋史学者で教育行政官台北帝国大学初代総長にもなりました。妹、操は助産婦となり、医師の夫を養子に迎え、家の跡取りとなり、門真に幣原医院を開業し、社会福祉事業にも取り組みました。操の夫が亡くなった後に幣原医院を継いだのは次女の節です。節は大阪府初の女医となりました。

## 大学そして外交官へ

子どもの頃、やんちゃな利かん坊であった喜重郎は、大阪城そばにあった官立大阪中学校に進学。大阪中学校は、英語の教育で知られていました。その後、第三高等中学校（首席卒業）を経て、1895年（明治28年）東京帝国大学法科大学卒業します。浜口雄幸とは、第三高等中学校、帝国大学法科大学時代を通じ

ての同級生であり2人の成績は常に1、2位を争ったといえます。

喜重郎は、学校時代から、将来外交官になろうという希望を抱いていました。

1896年（明治29年）9月、外交官に合格した幣原は、朝鮮の仁川、ロンドン、ベルギー、釜山の各領事館に在勤後、ワシントン、ロンドンの各大使館参事官、オランダ公使を経て1915年（大正4年）に外務次官となり、第一次世界大戦後にアメリカ合衆国大統領ウォレン・ハーディングの提唱で開かれた国際軍縮会議、ワシントン会議において全権委員をつとめるようになります。



駐米大使時代（1919-1922年）の幣原

## 国際協調「幣原外交」

外務大臣になったのは1924年（大正13年）の加藤高明内閣が



門真市の市長室に幣原喜重郎が直筆した「公直無私」の額が飾られています。1931年（昭和6年）、喜重郎が外務大臣時代、門真村村庁舎落成の折、寄贈しました。「公の職に就く者は実直を旨とし、私欲で行動してはならない」という喜重郎の考えを示したものとされています。

最初で、その後、若槻内閣（二次・二次）、濱口内閣と4回外相を歴任しました。

幣原の1920年代の自由主義体制における国際協調路線は「幣原外交」とも称され、軍部の軍拡自主路線「田中外交」と対立しました。1926年（大正15年）に蒋介石が国民革命軍率いて行った北伐に対しては、内政不干渉の方針に基づき、アメリカとともにイギリスによる派兵の要請を拒絶しました。

しかし、1927年（昭和2年）3月に南京事件が発生すると、軍部や政友会のみならず閣内でも幣原外交への反感が強まります。

1930年（昭和5年）にロンドン海軍軍縮条約を締結させると、特に軍部からは「軟弱外交」と非難され、1931年（昭和6年）、関東軍の独走で勃発した満州事変により、幣原は政界を退くこととなります。

幣原外交の終焉は文民外交の終焉であり、その後は軍部が独断する時代が終戦まで続くこととなります。

## 総理大臣に就任

終戦後、14年間もの長期にわたって政界を退いた幣原が総理大臣に就任したのも戦前の幣原外交にみられる国際協調路線が評価されたものと言えます。



門真市御堂町の願得寺にある幣原喜重郎の墓

1945年（昭和20年）10月6日、幣原が鎌倉で静かに一生を終えようと引越しの荷物を積み終わって、出ようとしたときに、宮内庁から参内せよと呼び出され、天皇から内閣組閣を命じられました。

10月9日に、10月5日の東久邇内閣の総辞職を受け、内閣総理大臣に74歳で就任しました。憲法制定など戦後の難局に対応しました。

女性参政権が認められた戦後初の総選挙となる第22回衆議院議員総選挙で日本自由党が第一党となり総辞職、第一次吉田内閣が発足する。幣原は無任所の国務大臣として入閣しました。

1947年（昭和22年）の第23回

衆議院議員総選挙で初当選。日本進歩党総裁となり、民主党の結成にも参加しましたが、片山内閣の社会主義政策を批判して田中角栄、原健三郎、本間俊一、中山マサ、小平久雄ら幣原派の若手議員とともに民主自由党に参加、衆議院議長に就任しました。

1951年（昭和26年）3月10日、議長在任中に心筋梗塞のため、78歳で亡くなりました。

## 喜重郎が生まれた門真から憲法九条を守る運動を

憲法九条の発案をした幣原喜重郎は門真で生まれました。喜重郎が生まれた門真から憲法九条を守る運動をすすみましょう。市職労は「安倍9条改憲！憲法を生かす全国統一署名（二千万署名）」を取り組んでいます。

また、地域では幣原喜重郎が1872年9月13日に生まれ、2022年に生誕150年を迎える記念すべき年に記念事業を進める準備が行われており、市職労も参加しています。

昨年12月8日には、本稿でもふれた堀尾輝久氏（東大名誉教授）を呼んで記念講演会をおこなっています。

ます。

今年6月1日には本稿でもふれたジャーナリストの鈴木昭典氏を呼んで記念講演会を予定。9月13日には記念事業実行委員会発足のつどいをおこなう予定にしています。

## 喜重郎をめぐる系譜

次項の喜重郎をめぐる系譜をみれば、興味深い多彩な人物がいます。兄、坦の次女・澄江は農芸化学者・古在由直の長男・由正に嫁いでいます。由正・澄江夫妻の長男が「コザイの式」で知られている天文学者・古在由秀であり、次男がマルクス主義哲学者の古在由重です。また坦の孫にあたる幣原廣は弁護士で、第二東京弁護士会所属であり、副会長の経験あり。多数の委員会活動に関与しているため、弁護士会では「多重会務者」と呼ばれています。

幣原喜重郎の妻・雅子は三菱財閥の創業者・岩崎弥太郎の四女。したがって喜重郎は加藤高明や岩崎久弥（弥太郎の長男、三菱財閥3代目総帥）らの義弟にあたります。

喜重郎・雅子夫妻は3人の男子をおり、長男・道太郎は元獨協大学教授、次男・重雄は元三菱製紙勤務、

幣原内閣で大蔵大臣を務めた渋沢敬三も遠縁にあたります。渋沢敬三は渋沢栄一の孫にあたり、日銀総裁や大蔵大臣を務める傍ら、日本における民俗学の発展に多大な貢献をした学者です。また、岩崎家との縁から、財団法人東洋文庫の理事長に就任し、三菱財閥解体をうけて運営危機に陥った同文庫を国立国会図書館支部として維持させました。系譜には幕末から明治時代にかけて活躍した政治家・実業家の後藤象二郎がいるのもおもしろい。

### 参考・引用した文献・サイト

酒井則行「憲法九条成立事情『資料』増補・改訂版」

酒井則行「門真出身 幣原喜重郎」

幣原喜重郎「外交五十年」

服部隆二「幣原喜重郎と二十世紀の日本 外交と民主主義」

堀尾輝久「憲法九条と幣原喜重郎」

『世界』2016年5月号

「ウィキペディア」

<https://ja.wikipedia.org/>

「みんなの知識 ちょっと便利帳」

幣原喜重郎元首相が語った

日本国憲法・戦争放棄条項

等の生まれた事情について

### 幣原喜重郎をめぐる系譜

